

病害虫の発生概況

〔病害発生概況〕

1. 稲・麦・畑作物

水稻：いもち病については、九州南部での発生が目立った年であった。宮崎県の早期水稻では、平年より早い5月1日に初発生を確認し、5月下旬から急激な病勢進展がみられ、ズリ込み症状を示す圃場も散見された。普通期水稻でもやや早くから発生し病勢進展が急激であったことから、葉および穂いもち注意報が相次いで発令された。鹿児島県の早期水稻でも平年よりやや早い5月下旬に初発生を認め、6月下旬の巡回調査で発生圃場率92%の多発生となった。佐賀県で葉いもち多、熊本県の一部でもやや多となったが、他県ではやや少～平年並みの発生量であった。穂いもちは、鹿児島県で多かったものの、夏期の高温多照により九州沖縄地域全体としては少～並みの発生となった。全国的な発生は平年並み以下で、いもち病に関する警報は0件、注意報が13県から延べ17件発表された。九州沖縄地域では、宮崎県から早期および普通期水稻に対して、葉いもち注意報が5月23日と7月18日、穂いもち注意報が6月5日と7月30日に発表された。鹿児島県から穂いもち注意報が6月11日、大分県からもいもち病に関する注意報が7月22日にそれぞれ発表された。稲作期間前半の気象条件をみると、3月中旬以降の気温が平年より高く経過し、早期水稻の生育が鹿児島県の場合で平年より7～10日程度早くなった。5月上～中旬に低気圧等の影響で曇りや雨の日が連続し気温が比較的高かったことから、イネの生育は軟弱徒長気味となり罹病的体質になるとともに、いもち病菌の感染に好適な条件が揃ったと推測される。近年、初発時期が早まり、葉いもちが多発する傾向にあるが、温暖化傾向に加えて自家採種の割合が高く、穂いもち防除や種子消毒等の不徹底がいもち病菌の初期伝染源量を高めているためと考えられる。2001年に佐賀県西北部地域で確認されたカルプロパミド剤耐性いもち病菌は、佐賀県内で広く認められ、宮崎県をはじめ九州各県でも確認された。耐性菌の動向については、引き続き調査研究が必要である。その他の病害では、紋枯病や細菌性病害が各県とも少～平年並みの発生で、少発生傾向が続いている。鹿児島県では、萎縮病および黄萎病が多発生となり発生圃場率も増加傾向にある。また、ごま葉枯病も多発生し、普通期水稻における9月の発生圃場率が34%と過去最大となったことが注目される。

麦類：うどんこ病やさび病類等の発生は全般に少なかった。コムギ黄斑病の発生が大分県で初確認され、早い時期からの枯れ上りが問題となった。品種チクゴイズミの罹病程度が比較的高く、品質や収量に与える影響が未解明であることから、今後の発生動向には注意が必要である。オオムギ網斑病は、発生時期がやや早く、発生

量も多くなっている。佐賀県で多発生、福岡県でやや多、大分県でも前年より多く、種子伝染性病害であることから発生地域の拡大が懸念される。ムギ類赤かび病は、福岡県、佐賀県、大分県で多発生、長崎県と熊本県でもやや多～多発生となった。5月上中旬に曇雨天日が続く気温も高めだったことと、薬剤防除実施率が低いことが要因として上げられる。発病程度とマイコトキシン産生量との関係、防除技術等に関しては未解明部分が多く、研究の進展が望まれる。

ダイズ：べと病が佐賀県と熊本県でやや多、葉焼病が長崎県で多であったが、全般に病害の発生は少なかった。

2. 野菜・花き類

イチゴ：炭疽病が福岡県、佐賀県、長崎県、熊本県、鹿児島県でやや多～多発生となり、長崎県と鹿児島県では葉枯れ性炭疽病が多かった。疫病、灰色かび病、菌核病は、品種の変遷あるいは高設栽培の増加に伴い増加傾向にある。

ナス：すすかび病が福岡県、佐賀県で初期防除の不徹底、年内の高温傾向、1月の天候不順により多発生し、佐賀県ではストロビリリン系薬剤の感受性低下が認められている。灰色かび病は、佐賀県で4月下旬以降の天候不順により多発生であった。うどんこ病は、沖縄県では少雨傾向のため多発生となった。

トマト：近年問題になっている黄化葉巻病は、新たに鹿児島県で発生が確認された他、福岡県、長崎県、熊本県、宮崎県で発生した。シルバーリーフコナジラミの防除や感染源の除去等の対策が立てられた結果、一部地域で拡大傾向にあるが、急激な蔓延は防止されている。葉かび病は防除が徹底されずに九州全域で発生が多く、灰色かび病は冬季の天候不順、換気対策などの不備により九州北部で発生がやや多く、疫病は大分県でやや多発生であった。萎凋病レース3が長崎県の一部でも発生が認められた。

キュウリ：褐斑病が福岡県、佐賀県、大分県でやや多発生、うどんこ病は長崎県、熊本県、沖縄県で、灰色かび病は佐賀県では半促成で4月以降の天候不順のため、べと病は鹿児島県で12～1月の日照不足、斑点細菌病は長崎県で、斑点細菌病は宮崎県の夏秋作で、やや多から多発生となった。

ピーマン：斑点病が大分県の夏秋作で生育初期の高温、鹿児島県の冬春作で日照不足のため、うどんこ病が大分県、宮崎県、鹿児島県、沖縄県で、モザイク病が宮崎県でやや多となった。

他の野菜：キャベツ、レタスの菌核病（福岡県）、ハクサイべと病（大分県）、ネギべと病（大分県）、ネギさび病（鹿児島県）、キャベツ黒腐病（鹿児島県）、スイカうどんこ病と炭疽病（鹿児島県）、早熟作カボチャのうどんこ病（鹿児島県）、ニガウリうどんこ病（沖縄県）、スイカ灰白色斑紋病（沖縄県）がやや多～多発生であっ

た。

花き類：キクえそ病は、福岡県で発生が継続し、新たに購入苗で発生したと思われる地域がある。キクわい化病（わい化ウイルス）は長崎県での初発生が確認された。キク白さび病は熊本県と鹿児島県で春先の気温がやや高く、また梅雨期の天候不順のためやや多発生となった。ツツジ褐斑病が長崎県で4月中旬～5月上旬の多雨によりやや多となった。

3. 果樹

今年度は暖冬傾向で3月に入っても全国的に高温であり、この傾向は5月上旬まで続いた。このため、一部を除き全体的に病害発生は少なかった。

カンキツ：全体的に少発生となったが、熊本県でそうか病の果実発病が4月中旬～5月の多雨によってやや多となり、宮崎県では越冬病斑量も少なく4月以降は少雨にもかかわらず黒点病がやや多であった。鹿児島県の離島のタンカン、沖縄県のタンカン等ではかいよう病がそれぞれ、やや多、多となり、沖縄県では注意報（8月1日）が発令された。これは台風の影響であり、沖縄県では7月以降、鹿児島県では8月以降に多発した。特筆すべきは、4月に鹿児島県と論島でグリーンング病の発生（4月9日付特殊報）が確認されたことで、すでに島全域に点在している。他の奄美群島での発生調査も行われ、今のところは未確認であるが、本病は接ぎ木のほかミカンキジラミでも媒介され、いったん発生すると根絶が困難であるため、早急な対応が必要である。

ナシ：4～5月の多雨と越冬菌量が多かったこともあって黒星病が多発し、佐賀、鹿児島両県で多、長崎・熊本両県でやや多となった。佐賀（5月9日）および福岡県（5月14日）では注意報も発令された。これに付随して、赤星病やうどんこ病も長崎県、熊本県、鹿児島県（赤星病のみ）でやや多となり、大分県では越冬枝病斑や罹病芽が多かったことに防除不徹底も加わって黒斑病がやや多となった。

ブドウ：長崎県（やや多）、熊本県（やや多）、鹿児島県（多）で夏場のべと病が問題となり、鹿児島県では前年の多発生で越冬菌密度が高かったことと梅雨期の降雨で発生に適した条件となったことが原因とされた。福岡県では黒とう病が4月中下旬の多雨により生育前半はやや多となったが、後半は防除が徹底されたこともあって少となった。昨年多発した晩腐病は、注意報（5月20日）も出されたものの全体的には少発生であった。このほか、大分県ではうどんこ病が初期防除の不徹底もあって乾燥少雨となった8月以降に多発し、鹿児島県では灰色かび病も開花期の多雨と日照不足で多発した。

ビワ：長崎県でがんしゅ病が7月上旬以降急増してやや多、灰斑病も収穫後および夏葉における発生、並びに腐敗果の発生が多くてやや多となった。がんしゅ病は7月上中旬の多雨および春季のナシヒメシクイの多発生が、灰斑病は7月上中旬および4～5月中旬の多雨が原因である。

カキ：福岡県、佐賀県では特に問題となる病害はなかったが、熊本県ではうどんこ病および落葉病類（9月に角斑落葉病が多発）がやや多となった。

4. 茶樹・特用作物

茶樹：病害はやや少～並発生のもが多かったが、鹿児島県で5月上旬の多雨により、一番茶摘採後の炭疽病と輪斑病の発生が目立ち、やや多となった。長崎県でも炭疽病の発生量がやや多となったが、4月下旬からの降雨が多かったことと越冬伝染源量が多かったことによると考えられる。

サトウキビ：黒穂病が沖縄県でやや多となり、宮古島の多良間村では多発生となった。前年の多発生を受けて防除対策が取られているものの、感受性品種の作付増加、罹病株抜き取りの不徹底等が原因と考えられる。鹿児島県ではサトウキビ葉焼病の発生圃場率が高くなったが、発病程度は低かった。

（九州沖縄農業研究センター地域基盤研究部 荒井治喜）
（「」 野菜花き研究部 西村範夫）
（果樹研究所カンキツ部（口之津） 伊藤 伝）

〔害虫発生概況〕

1. 稲・麦・畑作物

水稻：年明け後しばらくは日本列島へ寒気が入り込み低温が続いたが、その後、冬型の気圧配置は長続きせず、移動性高気圧に覆われる日が多くなった。そのため気温が上昇し、桜の開花が平年より10日前後も早くなるという、近年まれにみる暖冬となった。こうした高温傾向は5月上旬まで続き、九州地方の梅雨入りは平年より5日から12日も遅かった。梅雨前線の活動と関係するウンカ類の飛来は、平年と比べるとやや遅めで、セジロウカ類の飛来波は6月下旬から7月上旬にみられた。飛来量は全般に少なく、特にトビイロウカ類の飛来波は一部の地域を除いてほとんど確認されなかった。その後の発生量もイミダクロプリドやフィプロニルを含む長期残効性を示す育苗箱施薬剤の普及などもあって、やや多かつた鹿児島県を除き、他の県は全域で並み以下の少発生となった。

ウンカ類と同じように中国大陸から飛来するコブノメイガの主要な飛来波は6月上旬から下旬にみられ、その後断続的に7月中下旬まで続いた。飛来量は平年並みかやや少な目で、飛来波をまともに受ける沖縄県で発生量が多と報告された以外は、九州本土全域で並み以下の少発生であった。コブノメイガの場合もフィプロニルを含む長期残効性農薬の普及が多発生を抑える一因を成しているものと思われる。

近年の水稻害虫発生の特徴として、斑点米カメムシの多発生を挙げることができる。ここ2,3年は、発生量、被害とも、漸次増加する傾向がみられた。今年もまた、6月に宮崎県で、7月には大分県で注意報が発令され、その後の推移が心配されたが、結果的には、沖縄県を含む全域で並み発生に止まった。これは、斑点米カメムシを対象とする新規薬剤の開発と普及、それらを用いた有効な防除体系の確立、カメムシ類の発生生態を逆手に取った耕種的防除法の浸透等が原因しているのではないかと考えられる。九州地域における斑点米カメムシの優

占種は、従来、クモヘリカメムシやホソハリカメムシとされてきたが、最近ではそれらに加え、アカスジカスミカメやアカヒゲホソミドリカスミカメ等、従来、九州以北で問題となっていたカメムシ類の増加が目につく。考えられる原因は、これらカスミカメ類の増殖の温床となる休耕田やイタリアンライグラスをはじめとする飼料作物の栽培面積が増えたことなどが挙げられる。

水田初期に問題となるスクミリンゴガイの発生は、福岡県と宮崎県でやや多かったものの、他の県では並み発生に止まり、安定化傾向にあることを伺わせる。初期水田の水管理を初めとする耕種的な防除対策が確立し、農家レベルまで浸透しつつあることに起因しているのかもしれない。

ツマグロヨコバイの発生は、近年、長期減少傾向が続いていたが、今年は、やや少発生だった沖縄県を除く九州本土全地域でやや多から多の発生がみられた。特に鹿児島県では、本虫によって媒介される黄萎病も増えている。近年、本種に対しては効力が弱いとされるフィプロニル粒剤が育苗箱施薬剤の主流として急速に普及したことが原因しているものと思われる。

麦類：特に問題となる害虫の発生はみられなかった。

大豆：7月中旬から下旬にかけて、フェロモントラップによるハスモンヨトウの誘殺数が平年値を上回り、福岡県、長崎県、大分県では、8月上中旬に相次いで注意報が発令された。それを受けて、これら3県ではエトフェンプロックス剤、テフルベンズロン剤、イソキサチオン剤などを用いて緊急防除を実施した。概ね防除効果は高いと判断されたが、地域によっては十分な効果が得られなかったところもあり、使用した薬剤に対する本虫の感受性の低下が疑われている。その他の県では、8月から9月にかけて平年に比べると高温小雨の傾向が続き、ハスモンヨトウの多発生が心配されたが、慣行防除が功を奏し、被害の発生をほぼ平年並みに抑えることができた。

サツマイモ：九州地域で最も大きな栽培面積をもつ鹿児島県では、主要な4種の害虫であるナカジロシタバ、ハスモンヨトウ、イモキバガ、エビガラスズメとも並み以下の発生であった。これは、梅雨時期の多雨で、サツマイモ生育初期の害虫発生量が低く抑えられたことが主な要因と考えられる。その他、沖縄県、宮崎県、大分県など、主なサツマイモ栽培県でもほぼ同様の発生を示した。

ジャガイモ：主要産地である長崎県では春作、秋作とも、アブラムシ類、ニジュウヤホシテントウ、ジャガイモガなどの主要害虫は並み以下の少発生であった。ただ、春作、秋作とも、その初期にハスモンヨトウやシロイチモジヨトウなどの食害性ヤガ類の発生がやや多く、その後の推移が心配されたが、被害の拡大に結びつくことはなかった。

2. 野菜・花き類

共通：オオタバコガはフェロモントラップによる誘殺数が平年に比べ多く推移する傾向にあり、秋期にはキャベツ、レタス等の露地野菜、トマト、ナス、イチゴ等の施設野菜、キク等での発生が多く、佐賀県、熊本県、福岡県、長崎県では注意報が出された。また、大分県ではオオタバコガによる大豆の葉や莢の食害が観察され、大

豆がオオタバコガの発生源となる可能性があり、今後、注意を払う必要がある。ハスモンヨトウは、大豆での発生が多い傾向にあり、夏秋、秋冬作の野菜、花き類での被害も問題となった。また、シロイチモジヨトウもネギ、エンドウ、アスパラガス、露地キク等で発生が多い傾向にある。

トマトハモグリバエは、昨年までに九州全県に分布を広げたが、発生は落ち着いてきている。一方、マメハモグリバエは、ソラマメやインゲンで（鹿児島県）で多発する傾向が続いている。

ナス科野菜：アザミウマ類、アブラムシ類、ハダニ類、コナジラミ類等の発生は全般に落ち着いているが、大分県の夏秋ピーマンではミナミキイロアザミウマが多発し、鹿児島県の冬春トマトではアブラムシ類がやや多かった。トマト黄化葉巻病の発生は、媒介虫のシルバーリーフコナジラミに対する防除の徹底により減少傾向にあるが、局所的な発生は続いている。

ウリ科野菜：アザミウマ類、アブラムシ類、コナジラミ類、ハダニ類の発生は全般に少ない傾向であったが、アブラムシ類が半促成スイカ（鹿児島県）で、シルバーリーフコナジラミが抑制カボチャ（鹿児島県）で、ミナミキイロアザミウマがスイカとニガウリ（沖縄県）でやや多発した。

アブラナ科野菜：コナガは大分県の夏秋キャベツでやや発生が多かった他は全般に少ない傾向が続いているが、モンシロチョウは大分県や長崎県で発生が多くなる傾向がみられた。ダイコンではダイコンサルハムシが鹿児島県でやや多かった。

イチゴ：ハダニ類とアブラムシ類は、一部に発生の多いほ場もみられるが、全般に平年並みかやや少ない傾向が続いている。佐賀県と福岡県では、カキノヒメヨコバイの発生がイチゴで認められ、特殊報が出された。

ネギ類：ネギハモグリバエとネギアザミウマの発生が多い傾向が昨年から続いている。

その他の作物：アスパラガスのアザミウマ類（佐賀県）やゴボウのハイイロサビヒョウタンゾウムシ（鹿児島県）の発生が多い傾向にあった。

花き類：ツツジゲンバイの発生はやや少なかった（長崎県）。キクでは、オオタバコガやシロイチモジヨトウの発生が多い傾向にある。また、鹿児島県でキクのアブラムシ類、アザミウマ類、カスミカメムシ類がやや多い傾向にあったが、アブラムシ類、ハダニ類、アザミウマ類、マメハモグリバエ等の害虫は、全般的には特に際立った発生はなかった。

3. 果樹類

共通：果樹カメムシ類は、前年秋季に多発したことから越冬成虫が平成8年に次ぐ密度になった県が多かった。しかも春先に気温が高かったために、予察灯やフェロモントラップへの越冬明け成虫の飛来時期が相当に早くなった。また、春から夏にかけて気温が高く経過してヒノキ球果での生育開始時期も早まったが、球果の量が平年並みであったために、7月下旬～8月上旬にヒノキ林からの離脱が始まり、果樹園への多飛来がみられた。佐賀県、長崎県、熊本県では地域により、8月下旬～9月上旬にも当年世代成虫と思われる飛来のピークがあった

が、9月中旬には終息した。鹿児島県ではヒノキ、スギ球果が多かったために、9月下旬まで当年世代の多発生がみられた。

カンキツ：ミカンハダニは長崎県では越冬密度が高く、5月から急増して7月上旬にピークとなった。鹿児島県では梅雨明け以降の高温乾燥により、夏季に増加して秋季に多発した。ミカンサビダニは全般に前年より発生が減少したが、大分県では防除不徹底園で夏季から多発し、鹿児島県でも前年多発した園で密度が高くなったところもあった。沖縄県でも全般的にやや多発となった。鹿児島県ではリュウキュウミカンサビダニの発生が確認され、地域によっては、ミカンサビダニとの混発が認められた。春から夏にかけての気温が高めとなったことから、ミカンハモグリガが佐賀県と熊本県でやや多の発生となり、チャノキイロアザミウマも熊本県と鹿児島県でやや多となった。また、ゴマダラカミキリが鹿児島県で管理不良園を中心にやや多となった。アカマルカイガラムシによる果実の被害が、最近目立つようになった地域があり、長崎県ではやや多となった。

ナシ：ハダニ類が福岡県で6～7月の高温少雨によりやや多となり、鹿児島県でも夏季少雨のため秋季に密度がやや増加した。アブラムシ類が大分、鹿児島県で新梢伸長期に少雨傾向のためにやや多～多の発生となった。

モモ：主要害虫の発生は平年並みであった。

ブドウ：主要害虫の発生は平年並みであった。

カキ：カキノヘタムシガが福岡県でやや多の発生と

なった。また、フジコナカイガラムシが福岡県、佐賀県で多発した。この原因として、越冬密度が高かったこと、越冬態にばらつきがあり防除適期の把握が難しかったこと、果樹カメムシ類の防除のため合成ピレスロイド剤を散布したことによるリサージェンスが生じたことなどが考えられた。

4. 茶樹・特用作物

茶樹：クワシロカイガラムシの発生が、福岡県、佐賀県、鹿児島県において多、長崎県、熊本県でやや多となった。これは、暖冬のために越冬量が多く、かつ、夏期が小雨で幼虫の生存率が高かったことが原因と推定される。また、鹿児島県でチャノホソガが多く発生した。発生がやや多かった害虫としては、チャノミドリヒメヨコバイ（福岡県・宮崎県）、チャノキイロアザミウマ（福岡県・鹿児島県）、チャノホソガ（佐賀県・長崎県）、カンザワハダニ（鹿児島県）があった。その他の害虫の発生は、並みないしやや少なかった。

サトウキビ：沖縄県において、イナゴ・バッタ類の発生が多、また、アオドウガネ、カンシャクシコメツキ類、メイチュウ類、サトウキビノチビアザミウマがやや多かった。その他の害虫の発生は、並みないしやや少なかった。

(九州沖縄農業研究センター地域基盤研究部 菅野紘男)
(〃 野菜花き研究部 柏尾具俊)
(果樹研究所カンキツ部(口之津) 大平喜男)